

… 逆説の長州史

『重建明倫館と晋作が見限った朱子学』

福永隆 一 (萩高18回・昭41卒)

上部：上海旧市街
中央部：黄浦江 中央・蘇州河の合流部に外白渡橋
左手に旧イギリス領事館跡
下部：浦東新市街

「晋作の足跡を追って上海へ」

本年三月下旬、上海に飛んだ。

「東京龍馬会」世話人を務める高知出身の先輩の誘いで、「上海龍馬会」との交流会に飛び入り参加する機会を得たのである。両人の没後百五十年記念のこの年、晋作ゆかりの上海各所を訪ね歩くは大いに興味があつた。

翌朝、上海龍馬会メンバーの案内で、まずは超高層ビルの林立する浦東新市街の見学を済ませて、フェリーで黄浦江を渡り、旧フランス租界の新永安路近辺を散策した（晋作が滞在したホテル「宏和洋行」は、当地で旧オランダ領事館のそばにあつたというが現存しない）。次いで、「洋経浜（英仏租界を隔てた河岸）跡」を経て、外灘（バンド）沿いに北上し「江南海関（税関）跡」→「旧イギリス領



大境閣古城壁と筆者

事館跡」→外白渡橋→旧日本領事館を徒歩で巡った。洋経浜は埋め立てられて今は大通りの延安東路に、中国人から通行料一銭を徴収したという木製跳ね橋のヴェールズ・ブリッジは、後に鉄製のガーデン・ブリッジに姿を変え、現在は外白渡橋と呼ばれている。旧イギリス領事館は、この橋の手前、蘇州河が黄浦江に合流する角地の一等地にあつた。

夕刻に上海市南部、現在は中華路・人民路に囲まれた「旧上海县城」内に移動した。翌日以降の訪問に備えて、城壁の一部が残存する「大境閣古城壁」、晋作が兵衛の陳汝欽と親しく筆談を交わした「老西門」、そして、孔子廟のある「上海文廟」の場所確認の後、漸く懇親会となった（萩から持参した宝船の大吟醸と紹興酒の古酒、孔乙己酒家名物のソラマメで大いに盛り上がった）。



上海文廟内にある「明倫堂」入口

「混沌の中に賑わう租界！」
清末の上海で晋作が見たものは？」
 晋作は文久二年（一八六二年）、幕船の「千歳丸」に乗船、幕府の出貿易船（輸出）調査団に随行し、二カ月間上海に滞在した。長崎から海路七昼夜、三百五十八トンの木造帆船に、諸藩参加者を含めた日本人五十一名（総勢六十七名）が乗船、季節は西暦の五月末〜七月初旬、現地の不衛生環境も加わって、滞在中三名の病没者を出すほどに、難儀な旅であった。



上海龍馬会との懇親会（孔乙己酒家にて）

本年四月、萩博物館特別展『高杉晋作の決意・明治維新への助走』で、渡航日記『遊清五録』が公開された。清の末期、アヘン戦争後二十年余、太平天国の乱の最中、晋作が上海で見たものは？ 解説多数あるが、「①清の衰退は国策の誤り。②朱子学では戦が出来ぬ」、結論はこの二点に尽きる。

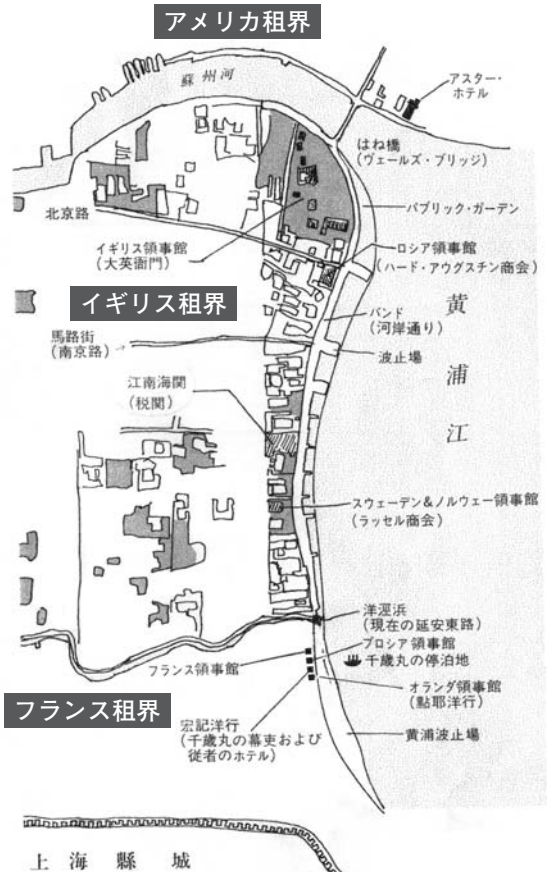
中華思想を根っ子に持つ朱子学を国学とし、異文化を蔑視し、祖法と身分制度に拘る余りに、文明・技術発展から取り残され、アヘン戦争に負け、五港の開港を迫られ、関税自主権を奪われ、居留地治外法権（租界の設定）まで認めざるを得なくなった清末の上海、そして、この中で、あだ花のように咲く租界の姿を目の当たりにしたのであろう。次は日本の番かと、晋作の危機感は想像に余りある。更に、朱子学の聖地・文廟に駐屯する米国人傭兵隊長に率いられた部隊の訓練風景や、最新鋭のアームストロング砲（施条後装式十二ポンド砲）の威力をつぶさに観察し、遊清五録にスケッチまで残している。近代的な歩兵訓練と、最新鋭装備があれば、少数でも強力な軍隊となること、即ち、師の吉田松陰が一八五八年松下村塾において『西洋歩兵論』で説いた、近代戦における歩兵の用兵の重要性に



延安東路（洋経浜の埋め立て跡）
 左手が旧フランス租界・右手が旧イギリス租界



外灘（バンド）の風景
 中山東路と延安東路（左手）の交差点付近



1860年代の上海地図
 高杉晋作の上海報告（富永孝著／新人物往来社）

確信を持ったことである。この上海渡航体験こそが、帰国翌年（一八六三年）の**奇兵隊の創設**、更に、僅か八十

人の決起に始まった後の**功山寺拳兵**（一八六五年一月）に決定的な影響を与えたと思える。まさかの時は、野村望東尼や日柳燕石を頼って、尻をまくって逃げる事が出来る男ゆえ、拳兵は勝算有つてのことであつたらう。晋作の死生観は師の松陰が獄中から彼に残した書簡から窺える「死して不朽の見込みあらばいつでも死ぬべし、生きて大業の見込みあらばいつでも生きるべし。」

因みに、幕末の長州藩海外渡航者の中で、筆者の知る限りでは、晋作は五番目である。何れも藩士の子弟・縁者であるが、一番・山縣半蔵（後述明倫館学頭の養嗣子・幕船で蝦夷・樺太視察）、二番・北条源蔵（万延元年遣米使節団参加、訪米第一号）、三番・山尾庸三（幕船で沿海州視察）、四番・杉孫七郎（晋作同様世子秘書役経験者、周布政之助の甥・文久遣欧使節団）である。前後して、桂路佑（旧姓福原氏）が幕船で黒竜江方面を視察したとあるが、万延元年審所調所以降、文久三年の間の正確な足跡が筆者には不明である。

「逆説の長州史・重建明倫館と晋作が見限った朱子学」

① 朱子学

「修己治人」を目標にした実践的な教えが孔子の儒教、これを十一世紀に、宋の**朱熹**が集大成したものが朱子学である。朱子学は、身分秩序を肯定し、礼をわきまえ主君に従うこと、祖法に従うことを説き、封建社会を支えた学問と言われるが、**徳川家康**は林羅山を登用し、朱子学を以て幕府の体制維持を図ろうとした。羅山は上野忍岡に私塾を開設し、孔子廟を建設した。関が原の戦より九十年、幕政が、武断政治から文治に転換し、安定期に差し掛かった元禄三年（一六九〇年）、**五代將軍綱吉**は孔子聖廟を湯島に移転（以降「湯島聖堂」と呼ばれた）、朱子学を幕府教学として浸透を図った。

② 明倫館

享保三年（一七一八年）、**長州藩五代藩主吉元**は城中三の丸に藩校開学を決意し、荻生徂徠の高弟で、その偉才を謳われた侍講の**山縣周南**の提案を入れ、孟子の一節からこれを明倫館と名付けた。湯島聖堂に学び朱子学に傾倒した吉元は、減封・改易が横行した時代背景もあろうが、幕府

の意向に添うがごとく聖堂で共に学んだ林派の小倉尚斎を初代学頭に招聘し、為に藩学は朱子学でスタートした。開学当初より藩校明倫館に孔子を祀ったのはこの為である。

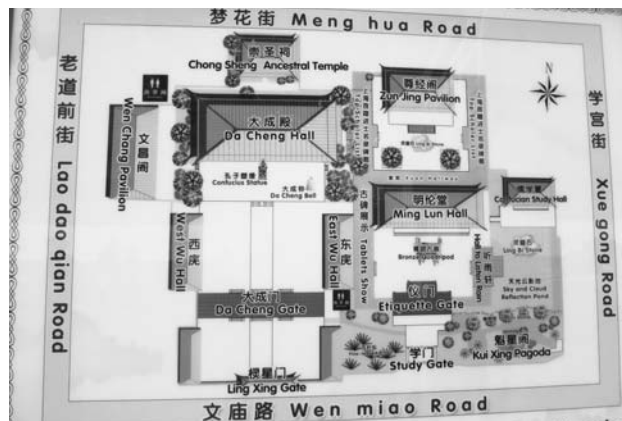
③ 長州藩徂徠学

尚斎没後の元文二年（一七三六年）、明倫館二代目学頭に就任した周南は、藩主、林家、師の徂徠に対する周到な配慮・根回しを以て、藩学を、制度文物と時代状況との関連を問う古文辞学、即ち師が唱えた**徂徠学**に転じせしめた。以降、幕末の嘉永元年（一八四八年）明倫館再興に備えた教学大綱で、「諸学は朱子学を主として」と改める迄の間、長州藩は周南の発展させた所謂「長州藩徂徠学」を藩学とし、西国における徂徠学の牙城とさえ評された。特に**第七代藩主重就**治下、**宝暦の改革**において、この徂徠学派の経世済民の施術が大いに功を奏した。但し、この経世論は儒者が政治を論ずるといふ意味において、朱子学の立場（主君に対して不敬・不忠の学であると主張）と異なるものを内包したとの指摘があり、注目に値する（河村一郎・長州藩徂徠学について・史都萩第49号）。

寛政二年（一七九〇年）徳川時代が



文廟内にある孔子像と大成殿



上海文廟（孔子廟）のレイアウト

爛熟期を過ぎる頃、朱子学衰退は幕府權威の衰退と危惧した老中・松平定信は、朱子学以外の学問禁止令(寛政異学の禁)を發し、湯島聖堂を林家の私学から幕府直轄の昌平坂学問所に改め、朱子学を幕府の正学・登用試験科目とした。

④朱子学転学と藩政改革

学問所における異学の禁止令は、徐々に諸藩に影響を及ぼし、長州藩は、嘉永元年(一八四八年)第13代藩主慶親(筆者注・禁門の変後に敬親)の治下、ようやく、藩学を徂徠学より朱子学に転学を決した。

筆者には、長州藩の決断は、以下に述べる意味から、幕府の思惑とは異なるもの即ち、学問(藩学)の転学そのものが目的ではなく、**転学は手段**であったと思われる。

天保の大飢饉を機に藩内でも一揆が勃発したが、「大塩平八郎の乱」發生と同年の天保八年(一八三七年)、第13代藩主に就任した慶親の喫緊の課題は、実質破綻した藩財政の改革と、これに対応出来る人材育成であり、この為に村田清風を登用し、清風は文武の奨励と人材登用を焦眉の急として掲げ、「毛利藩の天保の改革」に乗り出した(天保年間ピーク時の

藩の負債総額は、經常収入の二十四倍に達した)『山口県の教育史(小川國治共著)』。

改革の目指したものは、藩内商業の活性化(越荷方の拡充他)、内外情勢の変化に対応する洋学(洋医学・兵学)の振興、そして明倫館の拡充である。これは祖法を守れと説く朱子学の発想からは出ようもないもの。

長州藩の天保の改革は、幕府が行った三大改革(享保・寛政・天保・共に質素儉約・米の増産が主、謂わば、朱子学に侵された失政)とは似て非なるもので、筆者が井沢元彦氏に倣い、「逆説の長州史」と呼ぶ所以である。周南の唱えた経世済民の長州藩徂徠学は、異学禁止令が出された状況下においても面目を施し、脈々と命脈を保つのである。かくして、弘化三年(一八四六年)に明倫館運営費を藩主手許金から捻出するとして資金面の目途を立て、翌年に工事が江向の地で着工された。

長年徂徠学を奉じた藩学が、天保六年(一八三五年)山縣太華の学頭就任を以て一気に朱子学に転じた訳ではない。明倫館再建にあたって、明倫館再興方として学頭太華は、幕府の異学禁止令に添うようにと上申書を提出し、毛利藩は嘉永元年(一八四八

年)「諸学は朱子学を主として…」と**教学の大綱**を定め、ようやく転学を決した(筆者要約・小川國治著『藩校明倫館』／萩ものがたり346より)。

幕政に衰えは見えても、以降の言論弾圧「蛮社の獄」の如く幕府が諸圧力を増す中で、西国外様大名の雄が城中三の丸から藩校を大移転する事業である。幕府が目光らせたは必定であろう。幕府と事を構えずに、百十余年に渡り背負った徂徠学を脇に置いてまでも、藩政改革(人材育成)に邁進する為の決断であり、面従腹背こそが唯一残された道であった。

⑤削り取られた碑文の三文字

嘉永二年(一八四九年)、明倫館は二年半の造成期間を経て、万事昌平巒に模して中央に壮大な孔子廟を戴いて完成した。この時に、時代を象徴するような事件が起こった。(幕命により、朱子学転学を唯々諾々と受け入れたと、不満を持つての事か)、太華が撰文した碑文中の三文字が、何者かに削り取られた。明倫学舎一号館入口左手、二基ある石碑の内の右側に、傷付いた「**重建明倫館碑**」がある(筆者注・中国語で、重建とは建物又は、物事を立て直す意味を持つ)。

幕府の意向に添うことは、藩の存亡



重建明倫館碑

▲削られた三文字部分

に係わる大事である。朱子学信奉者なればこそ学頭太華が主君に示すべき忠節は、一旦、藩を挙げて朱子学に染まること。転学の進言をするからには、一切の責任を背負って実施するしかあるまい。これが学頭としての覚悟ならば、事件に際する太華の心情が窺い知れるものだが、如何であろうか。ともあれ、碑文の削られた痕跡は、補修もされずに、そのままに現存する。「所以崇奉□□□為国家之蕃屏也」の欠字は「幕命而」の三文字で、「幕命を崇奉して国家の蕃屏たる所以なり」と読まれる(田中誠著『目で見る明倫館』／史都萩第7号)

余談ながら、筆者には、太華が山本周五郎の名作『樅の木は残った』の主人公「原田甲斐」にかぶって見える。大往生を遂げた太華とは異なるが、作品では、江戸時代初期に起こった

「伊達騒動」を題材にして、従来極悪人とされた主人公が、実は幕府の取り潰しから藩を守った「忠臣」と描かれている。

⑥ 重建明倫館の実態

元来、朱子学に相對する立場の徂徠学ながら、嘉永年間を通じて朱子学への轉換が図られる過程では、万端昌平齋に模するも、実態は「徂徠古文辞の学風は明治維新まで潜在した。その間、学派の党争はあまり見られず、防長二州挙国一致の教学体制が窺われる」との指摘（笠井助治著『近世藩校における学統学派の研究』）に筆者は注目する。同じく、『萩高百年史』序章においても、転学の際

にほとんど深刻な内部対立・抵抗がなく、挙藩一致との表現がある。筆者には、時を追って幕府との緊張感が増す中で、両学派の違いは本題ではなかったと思える。

特筆すべきは、慶親の治下にあつて、既述の如く、破綻した藩財政改革の真最中で、「時勢の進運と外辺警備の必要に照らし、重建を期に、総合教育の場として大学の形態を具備した」こと、即ち、朱子学の体裁を凝らしながらも「洋学所・医学所を設け、西洋の科学技術・医学を講習し、兵

制・文物の導入に努めたこと」である。明倫学舎においては、完成後二十余年にして消え去った幕藩体制の象徴たる孔子廟の記述・説明に比べ、この部分の記述・説明に迫力を欠く印象を受けるが如何であろうか。祖法と身分制度に拘るあまり、時代に対応できない朱子学世界から脱出を図ろうと努力する姿勢、他藩に抜きん出た明倫館の先進性こそスポットライトを当てておくべきであろう。萩において、明治維新は松下村塾の専売品ではない。幕末期、明倫館を頂点として、支藩・郷校・寺子屋・私塾を含み藩内全域に及ぶ人材育成の為の教育体制あつてのものである。

⑦ 真逆の効果

寛政異学の禁は、長州藩においては、幕府の意図と真逆の効果をもたらした。「知行合一」を掲げる陽明学を奉じて、「一君万民論」を唱える松下村塾のような私塾を誕生せしめ、志士多数を生み落とし、尊王思想を沸騰させ、討幕の震源地となさしめた。学問の進歩を止めた挙句に、時勢の変化に対応できなくなつたのである。時代を憂う者が、代わって求めた学問的支柱が陽明学であつた。正に幕末この時期に松陰に学んだ晋作

は、後年既述の如く上海に渡航し、「清の衰退は国策の誤り、朱子学では戦が出来ぬ！」として朱子学を見限つた。幼少より明倫館に学び、後に孔子廟の世話役・廟司暫役や、生徒代表の都講、更に世子小姓役（謂わば、次期社長秘書役）まで務める男を、松陰のもとに走らせたのである。

再度余談となるが、前出の海外渡航第一号の山縣半蔵は、太華の養嗣子ながら、明倫館で兵学門下生として松陰に学び、四境戦争に際しては『長防臣民合議書』を起草し、二州の一致団結を促し、維新に邁進した。半蔵を養嗣子とした太華は、長寿を全うして慶応二年（一八六六年）に没した。いまわの際に「己の本意は巷間伝わる処にあらず。朱子学転学と明倫館重建で事がうまく運んだ（幕府の疑念を逸らし、次代の人材も育つた）。この後はお前が好きにせい！」

と言ひ残し、半蔵を朱子学の呪縛から解き放つたように思えてくるが、これは筆者の「予断」とご指摘を受けようか？「太華、あるいは明倫館儒学が動揺したとするなら、極論ではあるが、長州藩は討幕戦争をまたずにくずれていたかもしれない（奈良本辰也編『日本の藩校』）」と記述した高野澄氏とこの点筆者の思いは同じ

である。

「そうせい公、愚昧公、毛利・ファースト公」

第13代藩主には種々様々の評価があるが、根底に幕藩体制下における彼の生い立ちと、家督相続に係わる時代背景があつて、毛利家存続を第一（ファースト）としたであろう事が窺われる。（好む好まざるに係わらず）なりふり構わずに、時勢を得た部下の進言を容れて、幕末の人と時代空間（佐幕⇓尊王・倒幕、航海遠略策／長井雅樂⇓奉勅攘夷／久坂玄瑞、坪井九右衛門・椋梨藤太⇓村田清風・周布政之助）を彷徨するが如くに映るのはこの為と理解したい。筆者は、所謂「司馬史観」に与するものではない。敬親の功績は、謂わば、重建した藩校明倫館において、太華が見事に施した中華風の偽装に衆目を集めさせる一方で、館内大鍋に西洋風味の効いた具沢山の長州煮込みを仕込ませて、次代を担う若者に滋養を与えながら、幕末の荒波を乗り切つたこと。最大の功績は、幕命に添うようにして藩校では朱子学を奉りながらも、異学の最たる陽明学を信奉する松陰及び松下村塾の存在を許したことであろう。

「儒学（朱子学）批判の系譜」

儒学批判は、古くは秦の始皇帝時代、法治国家をめざす法家思想と、忠・孝を以て政事を行おうとする儒学の尚古思想が相容れず、「焚書坑儒」と呼ばれる儒家弾圧事件が起った。江戸時代（五代將軍綱吉の治世）、興味深い事件が発生した。赤穂浪士の処分に際しては、忠義を前面に主張する林家（朱子学）と、法治を主張する萩生徂徠（徂徠学）が対立し、綱吉は朱子学的な対応をあえて排した。陽明学は明代の王陽明が朱子学を否定し、自らの責任で行動する自由を謳う「良知主義・知行合一」を唱えたもので、江戸初期に中江藤樹がこれを説いたものを日本陽明学と呼ぶ。松陰は、著作『講孟節記』をめぐる太華との大論争で朱子学批判



上海文廟（孔子廟）内の明倫堂と筆者

を展開すると共に、獄中から晋作宛書簡の中で「李氏焚書の功多し」と評し、朱子学を激烈に批判して後に禁書とされた明の陽明学者・李卓吾の著作『焚書』を高く評価している。明治期、福沢諭吉は、『福翁自伝』において「門閥政治は親の敵でござる」と評し、佐賀出身の大隈重信は『葉隠れ（山本朝常著／江戸中期の佐賀藩朱子学者）』を評し、「奇異なるもの」と批判した。

「維新の精神 vs 孔子廟」

祖法・身分制度に拘る朱子学的な政治（幕政）を否定し、近代国家の樹立を目指したのが維新の精神である。歴史の反面教材として孔子廟を論ずることは良とするが、徳川幕府が体制維持の手段（象徴）とした孔子廟を、討幕して維新を成し遂げた本家本元・萩の明倫館の地に、維新百五十年記念の中核事業として、わざわざ再移設しようとするのは、維新の精神を否定するものである。戊辰戦争を戦い九段に眠る先達には如何に映るだろうか。しかも、孔子廟は明倫館重建の際に、手段として用を足したものであって、重建の真の目的は、洋学を含む総合教育施設の拡充を通じて、時代に対応する人材

育成にあったとするからには、殊更に違和感を感じる次第である。

因みに、再移設対象物件は、藩校明倫館百五十年の歴史では、明治維新に至る僅か二十余年間だけに存在した建物であり、維新後は無用として市内別処に移設され、以来百四十余年に渡り別途有為の用に供されている。『まちじゅう博物館』と言うからには、今在るままが居心地宜しかろう。

「消えては頭をもたげるやねこい外来二種」

井沢元彦氏の『逆説の日本史』風の解説手法を借用すれば、明治維新は、錦の御旗を打ち立て、体制（主権者）を、覇者（徳川幕府）から王者（天皇）にすげ変えて近代国家を目指したもので、中味は王政復古であった。時代が移り、大戦を期に主権者が変わって国民主権の国が誕生した（敗戦は極めて不幸で、大きな犠牲を伴ったが、代わって民主主義の至宝を手にした）。然し、明治維新から現在にいたるまでも、朱子学的なものは、絶えず機会を窺い、教育勅語や道徳教育の姿を借りるなどして、出番を覗いている。家康ならずとも、時の為政者からすれば、すこぶる使い出のあるシロモノである。同様に、陽明学も解

釈と対応を誤ると極めて危険と承知しておかねばなるまい。幕末期に横行した天誅・暗殺、或いはテロ等を招きかねない側面がある。「偏狭なナシヨナリズムの高揚と、死生を逸脱した心情と行動」が結びついて発生した事例多数を歴史が示している。手にした至宝を守るには、絶えず目を凝らすことか。来年は明治維新百五十年・明倫館創設三百年の節目の年、目出度くはあるが、浮かれてばかりはおれまい。

「終わりに」

上海から帰国後に、国立新美術館（東京六本木）の『ミュシャ展』を訪問し、『スラブ叙事詩』を観て感動した。パリでアールヌーボーの旗手としての大成功に飽き足らず、故郷チエコに帰国、スラブ民族の歴史を連作二十点に描き上げた画家の渾身の傑作である。第二次大戦が勃発し、ナチスのチエコ侵攻に伴い逮捕され、これがもとで病死したチエコ人画家であるが、会場に紹介された彼の言葉をお伝えしたい。「いかなる国の未来も、その国が歩んできた過去の歴史を知ることにかかっている」と。

（山口日米協会理事）